
未来日記　－違う未来－

灰色中学生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

未来日記 ― 違う未来 ―

【Nコード】

N6858N

【作者名】

灰色中学生

【あらすじ】

未来日記の二次創作です。

所有者の番号が違ったり、所有者事態が違ったりします。

この世界はドチラかというと、原作ほど殺伐とはしてません。

違う世界

「さて、はじめようか。違う世界、違う未来、違うサバイバルゲームを。ゼウス様、アナタは誰が勝者になると予想していますか？」
「……言ったはずだ。1st、天野雪輝だと。お前はまだ7thが勝つと思っているのか」

「ええ、そうです。7th、雨流みねねが勝つと」
「……なぜだろうか。7thは2人だったような……雨流みねねは9thだったような……この記憶はなんだ」
「なんでしょうかね」

「ともかく、今、未来日記所有者によるサバイバルゲームを開始する！」

――4月21日―― 1st

僕の名前は天野雪輝。趣味はダーツ。いままでなにもなく、平凡に生きてきた。僕は携帯に日記をつけている。ただ、つけている。その日記はいつからか、未来のことが記される未来日記になっていた。なぜか、使い方は全て頭に入ってきた。

2nd

私の名前は我妻由乃。いつからか未来日記を所有していた。ワタシは天野君を守る。そう日記に書いてあった。

1st

「由乃、一緒に帰ろう」
「うん、天野君」

僕はいつからか由乃と一緒に帰る習慣になっていた。将来の夢アンケートがきっかけで仲良くなったのだ。

……僕の夢はもう叶わないだろう。何故ならもう両親は離婚しているからだ。

「天野君、顔色、悪いよ?」

「あ、ゴメン。ちょっと嫌なことを思い出しちゃって……」

「そう……天野君、何か悩みとかあったらスグに言ってね! いつでも相談に乗るから」

「うん、ありがとう」

由乃は優しい。いつも僕を気遣ってくれる。

「あ、雪輝君じゃないか。偶然だね」

急に誰かに声をかけられた。この声は、秋瀬君だ。

「偶然だね。秋瀬君。今帰り?」

「うん、そうだよ。今日も我妻さんと一緒か。いつ見ても二人はお似合いだね」

「……」

由乃が赤くなっている。そんな由乃を見ると僕も恥ずかしくな
って――

「ははは、冗談だよ。ちょっとからかっただけ。どうする? ちょっと寄り道でもする?」

「うーん、どうする? 由乃」

「私は天野君がするとおりに動くよ。天野君は、どっちがいい?」

「そうだな、うん。少しでも寄り道しちゃうか」

「わかった。じゃあ商店街あたりまでいこう」

「うん」

僕達は商店街へと向かった。

「あ、すいません」

人にぶつかってしまった。ぶつかってしまった人は知っている人だった。

「あ、天野君かい。まっすぐ家に帰りなさい。今回は多めに見てあ

げるから」

「すいません、火山先生」

この人は火山先生、僕の通っている市立桜見中学校の教師で、僕や由乃の英語教師だ。

「先生、雪輝君は悪くありません。私は無理やり誘ったんです」

「え、秋瀬君！　僕なんかかばわなくても良いんだよ！　僕も、断らなかったし」

「……今回は見逃してやるといったろ。さあ、帰った帰った。一回帰ったらもう外で遊んでもいいんだからな」

「はい、わかりました。先生」

僕達は、各自家に帰った。

【第一話 完】

違う世界（後書き）

この作品は、書くのがとても楽しい！

三人目の日記所有者

「ゼウス様。私はまだ未来日記について説明を聞いていないのですが、簡単に説明してはくれませんか？」

「よいだろう。未来日記とは所有者の未来そのもの、破壊されれば所有者の未来が破壊されたと同様で、所有者は死ぬ。未来日記はその名のとおりの未来が書かれた日記だ。所有者がそれまでに書いていた日記と同じ間隔、同じ書き方、同じ見方で書かれる。未来日記は九十日先の未来まで書かれている」

「ほう。では、一日一回、とても細かく書いてある日記が未来日記になったとしたら見ればとても細かく書いてあるが、一日一回しか更新されないと言うことですね？」

「左様。そしてこの未来日記所有者達によるサバイバルゲームを最後まで生き残ったものが私を継ぎ、神になるのだ」

「神、ですか」

「この日記は、所有者の行動しだいで内容が変わることがある。しかし、誰かが誰かを殺すことが決定したとき、日記はDEAD E N Dになり、覆すことはできない。奇跡でも怒らぬ限りはな」

「だいぶわかってきましたよ。では、はじめましょう」

——桜見市商店街——

僕達はそれぞれ家に帰った。かえってすぐ、家を出た。

しばらく歩き、由乃に会い、秋瀬君と合流した。

「さて、どこに行こうか」

「そうだね。ただ合流しただけじゃあれだし……」

「わ、私は天野君と一緒に居るだけで十分、だよ」

「ありがとう、由乃」

「あれ？ 僕邪魔だったかな」

「いやいや、そんなことはないよ！」

「うん、秋瀬君がいてもいなくても同じだから」

「喜べば良いのかわからない言い方だね」

会話をされていて、突然一人の女性が声をかけてきた。なにか、フリフリした服を着ている。

「桜見中はどこにあるのでしょうか。そこに、探している人が居るはずなんです」

「桜見中はすぐその、大きい学校です。探してる人というのは？」

「火山高夫という教員なのですが……」

「火山……」

「天野君。それ、私たちの英語の先生だよ」

「あ、そうだ。どこかで聞いたことがある名前だと思った」

僕達の英語教師、火山高夫。僕はほとんど会話しないから名前は覚えていなかった。

「あ、三人方。未来、と言われて何を思いつきますか？」

未来、未来、日記。未来日記と言ってもだれにも通じないだろう。だから……

「パットはおもいつかないな」

「私も」

「僕も」

「そうですか。では、日記と言われて思いつくものは？」

……ッ！　なんで、まさか、知っているのか？　この、未来日記を。この人はカマをかけようとしている。未来日記は破壊されたら所有者も死ぬ。

危ない、危ない、危ない。ここでもうごまかそうか。もうごまかせはしないのか。もう、ばれているのか。

「逆に聞きます。あなたは何を思いつきますか？」

そういったのは秋瀬君だった。

「……私は携帯、です。携帯。未来、日記」

「……ッ」

僕は息を呑んだ。でも、僕だけじゃない。由乃も、秋瀬くんも。

「あらあゝ？　もしかして、なにか心当たり、ありますか？」

「天野君、秋瀬君、二人も？」

「う、うん。そうだよ、由乃」

「所有者が自分だけなんて、そんなおいしい話なわけないよね」

「……心当たりがあるようですね。もう隠す必要はない。自己紹介だ。私の名前は雨流みねね。テロリスト。7thだ」

「僕は天野雪輝。1st」

「私是我妻由乃。2nd」

「僕は秋瀬或。6thだ」

「キミたち。このサバイバルゲームの終盤まで、同盟を組まないか？」

同盟を組んだとしても、この戦いで生き残るのは一人だけ。いつかは殺しあうのだ。

「さあ、どうする？」

「……」

【第二話　完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6858n/>

未来日記　－違う未来－

2010年10月8日14時14分発行